

# 紗夜

壊された少女の物語

ダウンロード改訂版

前編



# 君と僕との御約束！

## カエルの御宿

- ・これはあらゆる意味で大人を対象にしたエロ小説です。  
青少年の観覧を禁じます。
- ・この物語はフィクションです。  
実際の事件、団体名、個人名、施設名等とは一切関係はありません。
- ・強姦・未成年の飲酒・薬物は法律により禁止されています。  
このストーリーはそれらの行為を推奨するものではありません。



# 目次

## 第一章

夜道 5

## 第二章

脅迫 41

## 第三章

拉致 83

本文朗読

表紙・裏表紙・挿絵イラスト

涼貴涼

丸  
月上仮面  
おひま



第

一

章

夜道



## 山本紗夜サイド 1 【 yoniti 01 】

「それじゃ、今日はこれで……今日は一日、とても楽しかったです。これなら明日は大丈夫だと思いますから、彼女との本当のデートを二人で楽しんでくださいね。でも彼女は、私の大切なお友達なんですから、あんまり悪い事はないでくださいね。本当にダメですよ」

私は、いまの私がつくる事が出来る精一杯の笑顔を浮かべながら、目の前の男性に言つた。

「駅まで送ってもらえれば大丈夫です。彼方が、お引越しをするまではお隣だったから、私の家が駅から歩いて少しだつて知っていますよね……だから大丈夫、彼方は明日の準備をする為に、早く家に帰ってください……でも、明日の彼女との本当のデートの時には、彼女がなんと書いても最後までエスコートして、彼女の家の前まで送つてあげなければダメですよ」

駅前、家まで送つて行くつかと言つ彼の言葉を、私は笑顔を浮かべながら御断りをする……本当に家まで、歩いて数分の道なのであると言つ事もあつたけど、本当の事を言えは……彼とこれ以上一緒にいたくなかつたから……

彼の事が嫌いな訳ではない……それどころか好きで……

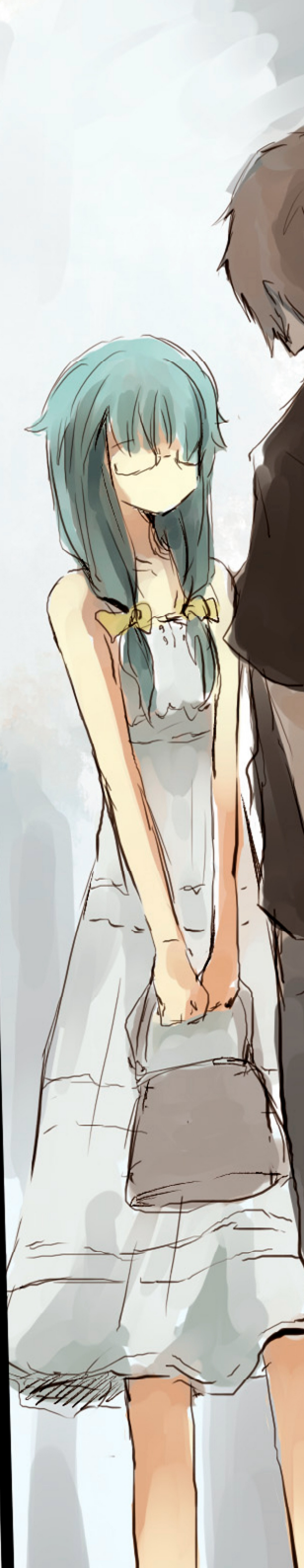
好きで……大好きで……出来るなら、いつまでも彼と一緒にいたかつた……でも……

彼は私の幼馴染……小学校の頃までは、お隣の家に住んでいた。中学校に上がる頃に、彼の家はお引越しをしたけど、それでも小さな頃からの大切なお友達……そして私が初めて好きになった人……でも、彼はその事を知らない……私の気持ちに気がついてくれなかつた。

そして私も、その思いを言葉にする勇氣は無く、ただ彼と幼馴染でいられる事に……好きだと告白をして、それを受け入れてくれなかつたらと思ひ……それが怖くて、言い出せないままだつた。

幼稚園……小学校……中学校……そしていま……彼の横にいる私は、彼と仲の良い幼馴染だつた……幼馴染でしかなかった。

そんな日々を過ごしていたある日、私は彼に相談を受けた。何なのだろうと思ひながら、もしかしたら私の気持ちに彼が気がついてくれたのでは……と、微かに私は期待したけど、彼が私に相談した事は、私の親友である女性の事が好きだという事だつた……それは幼馴染の友達……何でも話す事が出来る異性の友達に対して、彼が言つた言葉……そう……私は彼の幼馴染であり、友達でしかないと言つ事を、彼の口から聞かされたのと同じ事だつた……



彼は顔を赤くしながら、何とか彼女との仲を取り持つてくれないかと……本当に、切実に私に相談をしてくる……私の心など知らずに……それが、どんなにも残酷な御願いなのか、私の思いに気がつきもしないで……

「ええ……いいわよ……」

私は出来るだけの笑顔を顔の浮かべ……言う……私の好きな彼……私の大切なお友達彼女の……断る事など……出来る筈は無かった……

私は彼を彼女に紹介する……そして初めて知る……彼女も彼の事が好きであったという事を……相思相愛……お似合いの二人……私は、そんな二人を見て笑って祝福をする……だって……笑つ他に術が無かったから……

そして再び彼に私は相談を受ける……来週の彼女との初デート、不器用な自分では、どの様にエスコートをすれば彼女を喜ばせる事ができるのか解らない、だから女の子が喜ぶそつな、デートの段取りとかを教えて欲しいと、私の気持ちなど……当然知らないままに彼は聞いてきた……

「だったら私と、彼女とのデートの予行演習を……してみたらどうかしら？」

思わず私の口から出てしまった言葉……どつしてこんな事を口走ってしまったのか、言ってしまった後に私自身が驚いてしまったけど、それは名案だと言いながら、彼は何

時ものように笑顔を私に向けながら、御願いますと……何も知らないのに……私の本当の気持ちなど、何も知らないのに……言った……

そして彼女とのデートの前日である今日と言つ日に、私と彼は明日のデートの予行演習と言つ名目でデートをした……最初に最後の……私にとつて、ただ一度だけの彼のとのデートを……私と彼はした……

精一杯のおしゃれ……何時か彼と一緒にの時に着て歩きたいと思ひながら、着る事が無く仕舞い込んでいた白いワンピースと白い靴……何時もちがう取つて置きの黄色いリボン……薄くルージュを引き……何度も鏡を見直す……そして待ち合わせの場所へと、心をとぎめかせながら向かう私……

約束の時間より一時間も早く着いた私よりも早く、私を待つてくれている彼の姿を見た時……私の胸は高鳴ると同時に、締め付けられる様な苦痛を感じる。

彼にとつては、今日は彼女とのデートの予行演習ではない……だけど私にとつては、最初で最後の彼とのデート……ともすれば泣き出しそつになる心を抑えながら、私は彼のとのデートを楽しむ……楽しむ真似をした……

彼と一緒に見る映画……彼と一緒に入る喫茶店……彼と歩いて見て回る街並み……彼と手を繋ぎ……寄り添い歩く……私が何度も夢想したひと時が現実となつていただけ、

それは全て偽りでしかないと言つ事を……私は知つていた

そして夕闇が迫る頃、駅前で彼と別れる……家まで送つていこうかと言つ彼だつたけど、私は一人になりたかつた……何時までも彼と一緒にいられないなら、少しでも早く彼と別れて……一人になつて……泣きたかつたから……

そして私は一人で帰宅の道を歩く……普通に歩けば駅から数分の距離……だけと少しだけ遠回りして私は家への帰り道を歩く……お父さんは海外へ出張中、お母さんもお仕事の関係で明日の昼頃まで家に帰つては来ない、多少帰宅時間が遅くなつても大丈夫……もう少しだけ外を歩いて、彼と過ごした今日と言つ日を感じていたかつたから……

すでに暗くなつた道を、グルリと遠回りしながら家へと私は向かう……涙が滲み出した眼、かけている眼鏡、こしに夜空を見上げれば、丸いお月様とたくさんのお星様……それが少しだけ歪んで見える……

「きゃあっ！」  
 夜空を見上げて歩いていたらせいか、前から歩いてきた男性とぶつかつて転んでしまつた。

そしてぶつかった男性は、転んだ私に罵声を浴びせる……

「あつ、す、すいません……ごめんなさい」

その男性の罵声に驚き、少しパニックを起こしてしまつた

私は、転がつたまま謝る。そして立ち上がるつもりとした時に立つている男性が手を差し出してくれた。

「すみません、ありがとうございます」

私が立つの助けてくれるんだ……そう思つて私は、差し出された手を何の躊躇も無く掴む、そして立ち上がるつもりした……だけど私が掴んだ手は、強く私の手を握り返す。

「あ、大丈夫ですから、手を……そんなに強く掴まなくても、大丈夫ですから」

警戒心など無かつた……男性が私の手を強く握つたのは私を立ち上げさせる為の行為だと思つたからだ……

「きゃあー！」

私の手を掴んだ男性は、そのまま強く私の手を握つたまま、道の横にある雑木林の方へと私の手を引いて引つ張り込む。

「なつ……なに?」

突然に雑木林の中へと引つ張り込まれた私、驚きと戸惑いのせいで、一瞬声を出すことが出来なかつた。

「何をするんですか、手を離してください、手を離して!」

男は私の手を掴んだまま、雑木林の奥の方へとずんずんと進んで行く、さすがに身の危険を感じて、私は大きな声を出しながら掴まれた手を必死に振り解こうとしたが、男の力は強く振りほどく事が出来ない

「やあ、いやああ！ やめてください、手を離してえ、御願いですから手を、いやああ……」

私の身に何が起こっているのかそして何が起こるのか、それを理解することができなくて……怖かった……恐ろしかった……

【 yomiti 02 】

「手を、手を離してください、御願います。御願いだから手を離してえ！」

私は、男に手を掴まれ、雑木の奥の方へと連れ込まれながら、叫ぶ事しか出来ないでいた。

「誰かあ、誰かたすけてえ！ 誰か来てええ！」

大きな声を出して必死に叫び、腰を引いて、私を引つ張り続ける男から逃れようと、出来るだけの抵抗と抗いを繰り返すが、男の手は離れない……強く掴まれた手が引つ張られ続ける。

「あつ、きやあー！」

掴まれていた手が離されるのと同時に、私は草の上へと投げ出される。

「なにを……あつ、いやあ、いやあ、よらないでえ、こっちに來ないでください、やあ……いやああ……」

草の上へと放り出された私は、起き上がり逃げようとし

たが、身体の思つように力が入らず、満足に立ち上がる事が出来なかった。

「いやあ、こないでえ、來ないでください！ あっちにいつて、こないでえ！」

半分腰を抜かしたような格好、お尻を地べたにくつつけたままと言つ無様な格好で、男から少しでも離れようと……逃げ様として、ずるずると這いずる様に後ずさつたが、後ずさる私の背中に、何かがドスン！ とあたり、私はそれ以上後ろに下がる事ができなくなる。

「ひい、いやあ、あつち行つて、いやああ……」

背中あたり、私の後ずさりを止めたのは、一本の立木だった。

「やめて……おねがい、おねがいますから……やめてください……」

男が近寄つてくる……そして私の身体を立木に押し付ける様にしながら、私の着ている服へと……大切にしていた白いワンピースに手をかけ、下へと引き下ろした。

「きやああ……」

引き下ろされるワンピース、ブラジャーも一緒に引き下ろされ、私の胸が剥き出しになってしまつた。

「いやあ、はなしてえ……どいてくださいどいてえ！ 服が、服が破れちゃう。御願いですから、はなしてええ！」

剥き出しとなった私の胸、その剥き出しとなっている胸







を男は揉む。

「ひいあ、やめて、やめてください！ さわらないでえ、そんな強く……くう、いたあいいい！ やめてええ！」

男の手が私の胸を揉む。リボンがほどけ、乱れた髪を巻き込む様にしながら、強引に強く私の胸を揉む……そしてそれだけではなく、私の胸へと顔を近づけ……べろりと私の胸を……乳首を舐めあげた。

「やああ！ やめてえ、なにを、何をするんですか、やめてください、おねがいですから手を放してえ、胸を……胸を舐めたりしないでえ！」

私は暴れる、必死になつて暴れ続ける、男から逃れようとして、胸を揉む男の手を必死に押え、胸から離そうとして、顔を胸に押し付ける様にしながら、胸を舐め続ける男の顔を引き剥がそうとして……だけど男の手は、私の胸を揉み続ける……男の舌は、私の胸を……乳首を舐めしやぶり続けた。

「おねがいます。おねがいますから、私から離れて、私を離してえ！ いやあ、いやあ……！」

無駄な抵抗……そうとしか思えない私の抵抗、それでも悲鳴を上げながら私は必死になつて抵抗し続ける私……

「誰かあ、誰かあ、たすけてええ……！」

大声を出し叫ぶ私……不意に、胸を揉んでいた男の手と、胸を舐めていた男の顔が離れる。

「あつ……」

男が止めてくれたのかと思つた……だけど、次の瞬間に私の顔が男の手によって掴まれる。

「ひい……」

顔を掴まれ、そのまま頭を後ろの立木へと叩きつけられる。

「あぐう！ ひゅぎい！ あつうああつ……！」

何が起つたのか解らなかつた……続けざまに頭と言つた後頭部に強い衝撃が走る……一度ではなく、二度……三度と、連続して……

「あつ……つう、ああ……つう……」

かけていた眼鏡がどこかに跳んで行つてしまつ……口の中に、何かが滲み出し広がる……それほど強い衝撃であり、私の意識は朦朧となつた。

「あつう……ああ……」

朦朧となつた意識……男が掴んでいた私の顔を放す……

そのまま私は、草の上へと倒れこんだ……

パシャ！ パシャ！……と言つ音と同時に、何か光つ

ている……それが何のか……朦朧となつている頭では、理解する事が出来ない……

「ぐう……あつう、いやああ……やめて、御願いですか

ら……いやああ……」



制  
品  
版  
入  
続



！

